

土師器の窯

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

土師器の食器類、いわゆる「かわらけ」は、京都の発掘調査で各時代を通じて最もよく出土する土器です。形の変化が連続して追えることから、時間を推定する物差しとしてよく利用されます。しかしながら、その生産地や作り方などについてはまだよくわからないところがありました。

1996年、岩倉幡枝の元稲荷窯跡のそばで、多くの焼土の塊が出土しました。この地域は戦後まで土師器の生産を行っていた岩倉木野地区の近くで、国立京都国際会館が建てられたときにも土師器窯があったと報告されている所です。

そこで、この焼土の塊が土師器窯の破片ではないだろうかと考え、ばらばらのものをつなぎ合わせてみました。

その結果1～8までの比較的大きな破片を得ることができました(図1、写真1)。1は焼成室床面を支える梁、2～4は梁の上に貼って床面を構成するもの、5～8は床面を構成しつつ隣の梁とつながる部分で、格子を形成するものであると推定しました(図2)。支柱となるものは見つかってませんが、梁には支柱が取り付けられていたと思われる痕跡が残っています。梁部分の床面幅が約20cm、すき間の幅

が12～13cmあるので梁を3本設置すると窯の内径は110cm前後に復元できます。

この一群の焼土の塊と一緒に出土した土師器は16世紀半ば頃のもので、この土師器窯で生産されていたものと思われます。

写真2は木野の民家に現存している土師器の窯です。お話によると昭和30年頃までは使っていたようですが、それ以降は全く使われていないとのこと。所々補修した跡が認められ、焚き口脇の裾部分から風化して崩れ始めていて時間の長さを感じます。

内径は90cm、側壁の高さは70cmくらいです。焚き口に対して直交する方向で梁が3本渡され、火格子が形成されています。焚き口からのぞき込むと両側に梁を支える支柱が立てられていることがわかります。梁を焚き口に対して直交させて、両脇に支柱が来るように

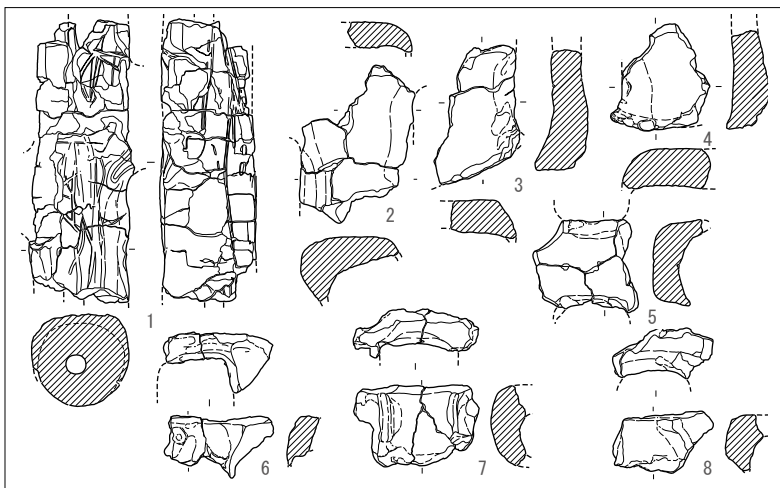


図1 焼土塊実測図 (1:12)



写真1 幡枝出土の焼土塊

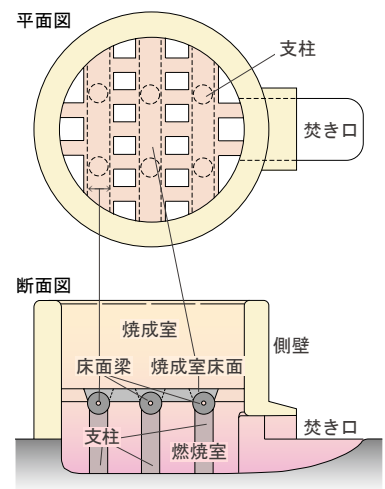


図2 土師器窯復元図



写真2 木野の民家に現存する土師器窯

しているのは、灰やオキを焚き口から掻き出す際に邪魔にならないような配慮と思われる。土器が下に落ちないようにすき間をふさぐための瓦のかけらが焼成室の床面にまだ残っていました（写真2右）。

窯自体だけでなく、当時使われていた土器の製作用具、窯焚きの道具などもよく保存されていて民俗資料としても貴重なものです。

写真3はこの窯をモデルに木野の愛宕神社内に復元保存されている土師器窯です。この窯は普段使われることはなく、年に一度湿気抜きのために火が入られるとのことでした。

図2で示した復元図はこれらの窯も参考にして作成したものです。

ところで、昨年、伏見区深草の西飯食町遺跡の発掘調査で焼土の塊が多数発見されました（写真4）。特徴も幡枝のものと類似し、土師



写真4 西飯食町遺跡の焼土塊検出状況

器の窯の破片であると思われます。梁の一部であろうと推測される破片もあります（写真5）。どうやらここでも土師器生産が行なわれていたのは確かなようです。時代は15世紀半ば頃のもの、一番古いものは11世紀後半前後のものが確認されています。

『^{しつまんどころしょう}執政所抄』や『^{ひょうはんき}兵範記』などの史料には12世紀代に深草の土器を使っていたという記事が認められます。以後、中世から近世にかけて土器作りがあったことが知られています。また、幡枝の土器作りについては、嵯峨野から分かれて始められたという中世後半の記事があります。

以上のことから、京都盆地内では、深草、嵯峨野、岩倉で土器作りが行なわれていたことがわかっていました（図3）。

嵯峨野においても、双ヶ岡の西側辺りで土師器の窯の痕跡を見つ



写真3 木野愛宕神社の復元土師器窯

けたという報告例があります。

京都の発掘調査では時代を知る物差しとして土師器が利用されていますが、それは連続と生産が継続されたという事実無くしては、成り立たなかったことなのです。文献では知られていない事も見つかる可能性もあり、今後に期待したいと思います。

（上村 憲章）

木野の土師器窯見学、写真撮影・掲載にあたっては、藤木卓蔵氏、藤本英子氏、藤本博次氏他の方々に御協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

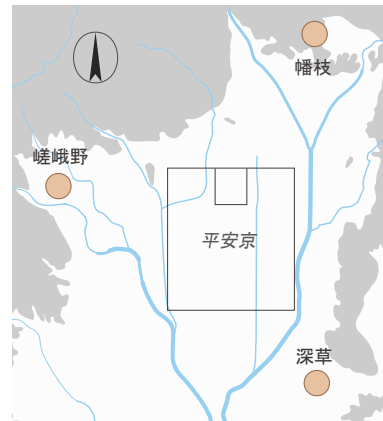


図3 土師器の生産地



写真5 西飯食町遺跡出土の焼土塊

西飯食町遺跡：以前から立会調査などで存在が知られていた平安後期から中世の遺跡ですが、昨年の調査でその一部が明らかとなりました。